

〔発表〕

東亜同文書院で学んだ台湾人学生について

東亜同文書院大学記念センター研究員 武井 義和



武井義和でございます。早速発表を始めます。東亜同文書院は上海に存在した日本の高等教育機関で、中国との貿易実務を担う人材の育成を目指した学校でした。1945年に閉鎖されるまでに5,000名ほどの学生が学びました。この学校には台湾人学生が21名入学しましたが、彼らについて取り上げた先行研究は存在しません。したがって、今回の報告では彼らの東亜同文書院入学前の状況、卒業後の就職先、戦後の人生や日本との関わりについて述べていきます。

東亜同文書院学生の特徴は、日本国内の各府県の子供、すなわち公費で派遣された学生が主流だったことにあります。これに対して台湾人学生はほとんどが「私費生」でした。東亜同文書院の学費は日本の主な大学の5、6倍も高額であったため、私費生にとっては大きな負担でした。この点を踏ま

え、台湾人学生の家庭環境について検討してみます。

呉文星氏は植民地期における台湾人の留学について、留学の希望は公費あるいは私人の学費援助を受けるということだけでなければ、通常は富豪の子弟だけがかねえられるものであり、実際に留学生は富豪の子弟が絶対的多数を占めていたと指摘されています。これは、学費が高額だった東亜同文書院の場合も当てはまるように思われます。また、確認できるだけで2人の学生の保証人が地方の名士または地方公共事業に尽力する人物として紹介されていました。

したがって、比較的に裕福な家庭か地方名士に属する家庭またはその親戚筋の出身であるか、もしくは莫大な学費援助を受ける機会に恵まれていた人たちであったと考えられます。

ところで、彼らの学歴をみると圧倒的多数が台湾の中学校の出身です。その傾向をみると、1924年までは学校が限られています。逆に1927年以降は出身中学校が多様化しています。1895年に日本の植民地となってから1910年代までは、小学校を卒業した台湾人が進学して学べる学校は総督府国語学校か医学校しかありませんでした。1915年に台湾人の中学校として台中中学校が作られましたが、このような台湾人の就学機会の制限が、1924年まで出身校が限定されていたことにつながります。

一方、中学校が増加したのは、台湾教育令が制定された1922年以降です。台湾教育令はそれまで行っていた日本人と台湾人を分けて教育する方針を改め、中等以上の教育機関における共学を容認し、また中等以上の教育を日本内地の教育制

度と同一化しました。

この法令の制定後、中学校が増加しましたが、学校数や定員面において、台湾人は進学するために日本人よりも厳しい倍率を乗り越えねばなりませんでした。しかも中学入試の場合、台湾人小学校で学んだ子供たちにとっては内容的に不利な問題も含まれていたといわれています。したがって、台湾人の中学校への進学は依然として大変な状況にあったといわれています。

以上の点を踏まえて考えると、台湾で中学校を卒業して東亜同文書院へ進学した学生の多くは、植民地教育体制下において厳しい勉学環境を勝ち抜いてきた者たちであり、また、より専門的な知識や教育を求めた者たちであったと言えると思います。

次に、東亜同文書院卒業後の進路について見ていきます。1945年以前に卒業して就職した人たちが6名いますが、そのほとんどが中国で就職しました。三井物産上海支店や母校の東亜同文書院に勤務した者がいました。また、中国各地を移動した者として、転職のため旅順から広東省へ移動した人物がありますが、1937年から40年にかけてのことであり、戦時期における台湾人の中国における行動という点で興味深いものがあります。

その中でも注目したいのが、1920年代から30年代に日本の外交官として勤務した人物です。彼を含めた特徴的な卒業生を次に紹介します。

いま触れた、日本の外交官となった卒業生は陳という人物でした。彼は中国にある総領事館や東京の外務省本省に勤務した後、1936年に広東総領事館副領事となりました。ただし、正式に就任して業務に従事することはありませんでしたが、副領事まで登り詰めた台湾人は彼だけであるといわれており、特筆すべき人物です。

また、1927年卒業の彭という人物も挙げておきます。本日ご臨席の許雪姫先生が研究されていますので、そちらを引用する形で紹介します。彼は戦時中に汪精衛政権の財務部参与を務めますが、実際は国民政府側の特務でした。そのため一度逮捕されましたが、周仏海の尽力によって釈放され復帰しました。しかし、日本政府と汪精衛政権との秘密条約などの情報を収集していたために、日

本側により殺害されたそうです。

彼らは珍しいケースですが、1945年以前に卒業し就職した人達の動向は不明な点が多いため、今後の研究課題だと思います。

次に、第二次大戦後の状況について見ていきます。すでに卒業していた人たちはもちろん、在学中だった人たちもそのほとんどは戦後、台湾に戻りました。その後、彼らが最も多く従事した業種はビジネス界・金融界でした。貿易会社や企業、銀行などに勤務しましたが、中には会社社長や取締役などにまで上り詰めた人物も何名かいました。

そして、1960年代以降に仕事を通じて日本と関わりを持つ人物が複数現れたことも、大きな特徴の1つです。それは台湾や香港において現地に進出した日本の企業や銀行に勤務したり、逆に台湾から東京の支店に赴任するという形でみられました。この点も戦後の台湾と日本との関係を考える上で重要かと思います。

以上、従来研究されてこなかった東亜同文書院で学んだ台湾人学生について、その実態を明らかにしてきました。最後に今後の主な課題について述べておきたいと思います。

1つ目は東亜同文書院への進学について植民地期の台湾人の留学動向に位置付けて分析していくという点です。2つ目は台湾人学生は東亜同文書院でどのような学生生活を過ごし、その中でどのような意識を持っていたかという点です。3つ目として、1945年以前に就職した卒業生の動向も不明な点が多いので、その実態解明も今後の研究課題だと思います。

以上で私の発表を終わります。ご清聴有難うございました。

司会 では、続きまして許雪姫先生の方からお願いします。

許雪姫 皆さんこんにちは。今回は武井先生による東亜同文書院台湾人学生の話があり、嬉しく存じます。時間が限られておりますので、簡単に申し上げます。最初に、予稿集にある表1と表2の人々の名前ははっきりと書くべきです。それはただ数十年前のことで、もし名前を書かなければ、調べることが困難です。実は、私は個人的にあらゆる学生

のリストを持っています。しかし、それは武井先生の研究から取った資料ではなくて、滬友会の資料です。実は、卒業生 21 名のほかにあと 5 名います。そのリストに入っていない原因は、たぶん予科に在籍しているか、卒業していないかだと思います。しかも、その中の 1 人か 2 人は地方の名士の子孫で、それは武井先生がおっしゃったように、東亜同文書院の入学生は裕福な家庭の出身だと思います。1 人目は劉改造さん。2 人目は呉三連の息子さんです。私個人的には 11 人のリストを持っていますが、1935 年以前の学生が少なかったことと、1942 年以降学生が増えたことを分析しなければならないと思います。そして最後に、私は上海の東亜同文書院の台湾との関係は、この文章が指摘したように密接だと思います。例えば、東亜同文書院の卒業生で台湾総督府に勤務する人が少なくありませんでした。東亜同文書院に勤めた大津麟平は台湾総督府民生局に入って、佐久間総督の武断政策に反対し、総督府を辞めたのです。そして戦後、日華条約調印の後たくさんの東亜同文書院の卒業生が台北の日本大使館に勤務しました。そして、東亜同文書院を卒業した中華民国国籍の人たちも戦後台湾に移ってきました。例えば、周憲文や欧陽という人物などがいます。この文章は素晴らしいと思います。たくさんのヒントがありますが、ここでは時間の関係でお話しません。以上で私のコメントを終わります。

司会 有難うございました。会場の方からお一人だけ、ご質問があれば。宜しいでしょうか。ないようでしたら、今のコメントに関して。

武井 許先生、有難うございました。幾つかの重要なご指摘を頂きまして、今後の研究に活かしていきたいと思います。まず最初に、予稿集にある私のペーパーに表 1、表 2 が載ってまして、そこでは書院生の名前を一部を除いてアルファベットで書きました。実名を挙げるべきだったというご指摘だったのですが、プライバシーの観点から名前を仮名にした方が良いだろうという判断をしまして、実名を挙げませんでした。今、日本ではプライバシーとか個人情報の保護ということが厳しいですので、そういう観点から実名を挙げませんでした。それから、卒業生については今回 21 名とご紹介しました

が、あと 5 名いるというお話がありました。戦争末期になりますと東亜同文書院の学籍簿は非常に不完全なものになっていきます。中国人なのか台湾人なのか判別つかない人物がおりまして、また戦争中には朝鮮半島で行われたように、台湾名を日本名に改める「改姓名運動」というものが行われています。調べていきますと日本名を名乗っている人物の中に、実は台湾人であったという人も若干ありまして、台湾人であるかどうか判別が難しいというケースも見られます。したがって、許先生がご指摘になった 5 名は、私が見落としたのであろうと思います。

最後に 1 つ申しますと、許先生のお話の中で、戦前に中華民国国籍を持っていた人も戦後台湾に移ってきたというお話がありまして、その中で欧陽という人物を挙げられましたが、おそらくこれは欧陽可亮という人物だと思います。彼は戦争末期の東亜同文書院に教員として在籍していたという記憶があるのですが、戦後愛知大学に来まして、中日大辞典の初期の編纂に関わっていたと聞いております。以上です。

司会 有難うございました。ちょうど時間になりました。なお、今日はお話にならなかったけれども、戦後台湾で東亜同文書院の同窓会が組織された頃は、表に出せなかったそうです。後半は表に出せるようになりましたが、こうしたこともありました。では、どうも有難うございました。